

課題と講評

どのような形で課題が出され、講評には何が書かれて戻ってくるのかを見てみましょう。

【課題例】

Code xxx

科 目 文法

01 私たちは次のような二通りの言い方をすることがある。この二通りの言い方にはどのような違いがあるのだろうか。わかりやすく説明せよ。

① 水が飲みたい。

② 水を飲みたい。

02

* この設問は実際のものではありません。

【解答例】

どちらの表現も間違いではない。また、それほど大きな差異はないと考えられる。

あえて言うならば、②「水を飲みたい」といったほうがよりのどが渴いていて早く飲みたいという感じがする。

また、①は「コーラやビールではなくて水こそが飲みたい」といった発話者の気持ちが表現されている。.....

【講評例】

動詞「飲む」は、〈誰ガ〉〈何ヲ〉の二つの要素がそろって初めてその意味的世界が完成します。

① 太郎が ジュースを 飲む。

② 太郎が飲む。

たとえば、②のように「ジュースを」という成分がないと「飲む」という動詞が表現しようとする意味は完成しないのです。

同様に、動詞「取り出す」ですと、〈誰ガ〉〈何ヲ〉〈どこカラ〉といった三つの要素がそろう必要があります。

③ 花子が アイスクリームを 冷蔵庫から 取り出す。

動詞一つひとつに、その意味的世界を完成させるための、それぞれ必要な要素があるということがわかります。それらの要素を「必須の補語」といいます。その動詞の意味的世界を完成させるために必ず必要となる語という意味です。例文中の下線の部分は格助詞です。格助詞は、その格助詞のついた語がその文の述語に対してどのような働きをしているかを明確に表します。格助詞「ガ」がついた語は主語（主格）の働きをしています。すなわち、述語が表す動作・行為や状態の主体という意味です。

動詞「飲む」はこのようにいつも〈何ヲ〉を必要とするので、「ヲ格を取る動詞」と言われます。「ヲ格を取る動詞」には他に、「聞く」「見る」「書く」などがあります。この「ヲ格を取る動詞」は日本語学習者に日本語の助詞の存在を知ってもらうことからとても大切な初級指導項目です。

ところが困ったことに「ヲ格を取る動詞」としてこの動詞「飲む」を学習した日本語学習者の前に

突然、次のような表現が現れます。

④ 太郎はジュースが飲みたいそうだ。

この動詞「飲む」の飲もうとする対象が〈何ヲ〉ではなく〈何ガ〉で表されています。これには日本語学習者は戸惑うでしょうね。けれども日本語では確かにそう表現することが多いのです。さらに困ることに、このような場合に常に〈何ガ〉を用いるのではなく、次のように〈何ヲ〉を用いることもあるのです。

⑤ 太郎はジュースを飲みたいそうだ。

では、この③と④の違いはということなのでしょう。これが今回の課題です。

〇〇さんの解答にあるように、①は「コーラやビールではなくて水こそが飲みたい」といった発話者の気持ちが表現されているということが出来ます。これは助詞「が」の性格の一つです。次の例文を見てください。

⑥ 田中さんは学生です。

⑦ 田中さんが学生です。

それぞれどこにフォーカスが当たっているかと考えてみましょう。そのことを明確にするためには、それぞれを問いに対する答えと考えると、いったいどんな問いに対するものかを挙げてみます。

⑧ 田中さんは何ですか（田中さんは何をしている人ですか）。

⑨ 誰が学生ですか（学生はどのかたですか）。

⑥では「学生です」に、⑦では「田中さん」にそれぞれフォーカスが当たることになりますね。助詞「が」の性質の一つということが出来ます。

さて、ここで整理しなければならぬことは、なぜ「ヲ格を取る動詞」が「ヲ」ではなくて「ガ」を取るのかということです。

*

テキスト 210 ページの〈広げよう・深めよう〉[格助詞が表わす意味]を読んでみましょう。「が」について、「述語によっては単純に〈動作〉の主とは言にくいものがある」と述べられています。

そこで、ガ格を必須成分として取る表現に次のようなものもあるということと一緒に考えてみると面白いでしょう。⑩と⑬に何か共通点が見えてきませんか。

⑩ 太郎がドイツ語を話す。

⑪ 太郎はドイツ語が話せる。

⑫ ビルの屋上から富士山を見る。

⑬ ビルの屋上から富士山が見える。

*

残念ながら再提出ということになりましたが、とても面白い言語現象ですから、丁寧に整理し、分析してみるといいですね。

次回のレポートを楽しみに待ちます。